

ふるさとから挑戦

第48話 本物の誇り

④

(敬称略)

薫風の季節を迎えた港町に、勇壮なラップと車輪のきしむ音が響く。今年5月16、17日に行われた美川地区の「おかえり祭り」で、美川仏壇の職人衆は、街を力強く練り歩く台車に安堵の表情を浮かべた。

歴史に名刻む場

祭りの華である13台の台車には、美川仏壇の粋が集められている。鮮やかな漆や金箔、蒔絵は「動く文化財」の異名を取るほどだ。

その、美川の「宝」の修理は代々、仏壇職人が請け負っている。解体すれば、あちこちに藩政期以降の名工の技が残る。「下手な仕事したら、後

の者にも恥ずかしい」。美川佛壇協同組合理事長の北島与八郎(78)が言う通り、台車の修理は歴史に名を刻む場でもある。

今年、全町の中でもひととき大きな美川中町の台車が輝きを取り戻した。74年ぶりの大修理で、車輪が取り替えられるのは約200年前の建造以来、初めてである。「これですまた100年、200年は大丈夫やな」。晴れ晴れとした町会関係者の笑顔に、職人たちの身が引き締まる。

「チーム美川」で各地の宝修復



おかえり祭りの台車修復に取り掛かる職人たち ―昨年6月、白山市美川浜町

寺院の内陣や神輿、曳山など、修復の注文が全国から舞い込む。昨年5月、能登町から持ち込まれたのは石川県指定無形民俗文化財「小木とも旗祭り」の主役である神輿だ。

「対抗心が結束力

この修復に、美川佛壇

協同組合は加盟店が分担して作業を担う新たな取り組みで臨んだ。小さな産地にとって、店単位での受注は職人の数が限られ、仏壇製造との兼ね合いから、修復を断らざるを得ないケースもあったからだ。担ぎ棒の取り換えや、

金箔の張り替えなど、組合が各店に仕事を割り振り、毎月の役員会で進捗状況を報告し合った。「チーム美川」で、取り組んだ神輿は30人を超える職人が携わり、約11カ月間で完成した。「みんながいい緊張感で取り組めた」と、「総監督役」

5月3日の「小木とも旗祭り」当日、美川仏壇の職人たちは能登町を訪れた。住民らに厳かに担がれ、御座船で海上を巡る神輿の輝きに胸を熱くした。「美川に地域の宝を預けてくれる。職人冥利に尽きるね」。

仏壇製作と文化財の修復は、美川産地にとって今や、車の両輪のような存在になった。美しくよみがえった文化財が、言葉ではなく目に見える形となって、美川仏壇の技を全国各地に伝えている。

(藤本典子)